

マネージャーに聞く・平岩佑梨（法大）／BOX

2016.6.14 13:32

東京六大学の中で唯一、関東大学ボクシングリーグ1部に所属する法大ボクシング部。法大のリングサイドに、女性のサブセコンドがいる。試合を冷静に観察し、ラウンドごとのインターバルでは、選手のマウスピースを洗い、水を差す。セコンドアウト時には慣れた様子で椅子を下げる。彼女の名前は平岩佑梨さん。法大ボクシング部のマネージャーだ。

なぜ、ボクシング部のマネージャーになったのかを尋ねると、1年生の時にたまたま同じ学部・学科だった現主将の鎌田稔生に誘われて入部したという。元々、中学・高校では陸上部に所属し、短距離選手として汗をかいていた。大学に入学し、「何か新しいことをしたい」という思いの中、誘われたのがボクシング部のマネージャーだった。法大ボクシング部は創部90年以上の歴史を有し、日本一を目指す伝統校。今まで、「日本一」を目指している集団にかかわることが無かった。まさに、法大ボクシング部のマネージャーは、彼女が求めていた「何か新しいこと」だった。日常のマネージャーとしての仕事は、掃除、洗濯物の整頓、書類整理、主務としての事務作業などだ。

近年、法大は1部リーグで苦戦している。強豪ひしめく1部リーグで、今年も3戦全敗。ボクシングは、どんなに一生懸命に練習し、つらい減量を克服しても、全く対戦相手に歯が立たず、残酷な現実が突きつけられてしまう場合がある。勝者と敗者の対比がどのスポーツよりも明確だ。そんな時、平岩さんは後樂園ホールのトイレで悔しさのあまり、一人号泣する。彼女も法大ボクシング部の一人としてリーグ戦を戦っているのである。

学年が増すごとに、毎週のミーティングの中で、何が課題で、具体的にどう改善すれば良いのか彼女から発言できるようになった。同年代の学生が、サークルなどで青春を謳歌していることについて聞いた。「ボクシング部のマネージャーをやって良かった。法大ボクシング部のマネージャーは、幅広い世代の人たちと接し、責任ある仕事を任せてもらえて成長できる」創部90年以上を誇る伝統校でしか味わうことができない、彼女ならではの青春を謳歌しているようだ。今年が最終学年で、部活動とともに「自分が考えたことが発揮できて、人と接する仕事がしたい」と、就職活動中でもある。残り2戦、法大ボクサーたちが、平岩さんをトイレで一人号泣させずに、リーグ戦での勝利を彼女にプレゼントしてくれることを期待したい。（岩崎仁）

平岩佑梨（ひらいわゆり）

法大ボクシング部4年。文学部心理学科在学。埼玉県越谷北高校出身。